

遺族挨拶

I 葬儀・告別式にて——父を送る言葉

本日はご多忙のなか、父、稲賀敬二のために、これほどまで大勢のかたにお越し戴き、深く感謝申し上げます。これほどの数の参列者がこられようとは予想もしていなかっただけに、私どものほうで十分に手が回らず、とりわけご着席いただけない参列者の皆様には、至らぬところ、まことに申し訳なく、心からお詫び申し上げます。

親族を代表し、最後に一言挨拶申し上げます。

公務出張で行っておりました中国より、昨日四月十三日遅くに戻りました。一週間前に出発する際には、躊躇がありました。行ってこい、と申したのは父のほうでした。互いに軽口を叩きながらも、何故か立ち去りがたく、手のひらを重ね、互いの指を握りあつて、しばしの時が流れました。「名残惜しいか」との、いささか挑発するような、いたずらっぽい問いが、父の口から発せられました。それが生前に聴いた、父からの最後の言葉となりました。

容体急変・重体の知らせを受けたのは、北京から承德への移動の途上、山路を疾走するバスの車内でのことでした。同行の北京大学の女子学生の方から、国際電話です、との報を受けた瞬間に、ほぼ事態は察知できました。電話の発達のお陰です。しかし異国の、それもとりわけ辺鄙な土地のこととて、単独途中下車して北京へとつて返すことも、ままなりません。途中で一度、一時停車の際に国際電話を入れ、母と短時間話すことができました。車道の脇で、耳を聳する周囲の騒音の合間から、普段とは一変した、まるで別人のような母の重々しい声が、受話器ごしに、とぎれとぎれに聞こえました。その日の夜半から苦しみはじめ、午前三時ころ石橋信三医師の手当を戴いたこと。明後日、原田病院への再入院の手筈だが、容体からして、移送が可能かどうかは不明、とのことでした。話はまだできるのか、との問いには、痛みを訴えてはいるが、受

け答えができる状態にはすでない、という様子が伝えられました。思えば同時刻のころに、父が苦しんでいるのを夢で見っていました。しかし翌朝は、早朝の出発前の繁忙もあつて、日本に電話一本入れる余裕がありませんでした。せめてもう一時間早く連絡が取れば、まだ出発前で、ただちに北京空港を目指せたのにと、後悔の念に捕らわれました。車中に閉じ込められたまま、なす術もなく、さらに二時間の道程の後、ようやく目的地に達し、バスから解放されました。

承德は、北京から北西へ二五〇キロ、内モンゴルをすぐ背後に控え、清の皇帝が避暑に訪れた故地にあたります。燕山北部の崇山の嶺みねに囲まれた、景勝の地です。そこに到着したときには、現地時間の一時を僅かに過ぎておりました。宿舎となった山荘賓館に入るなり手筈を探り、ようやく広島の自宅と電話が繋がりました。「いかがですか」との問いに「さきほど亡くなりました」と、母の無機質な、感情とは無縁の冷静な、抑揚のない声が返ってきました。その声を、動揺もなくすなおに納得した自分を、記憶しています。発信を準備していた電文は、その瞬間に、無意味な時効の文面へと変貌しました。打電室の窓の外に広がる青空の、悲しいまでに美しかったことのみ、記憶に淀んでいます。

避暑山荘は、康熙帝が十八世紀の初頭に築き初めて以来の歴史をもち、中国に現存する最大の庭園です。そこに五月晴れのようにすがすがしい日差しが降り注いでいました。皇帝の宿舎の背後には、丘陵に囲まれた広大な敷地のなかに、池が自在に巡らせてあり、その北端には、熱河の水源となる、不凍の温泉も沸いています。午後いつぱい、友人たちとこの庭園を散策して過ごしました。蓋がった気持ちが晴れ、心の洗われるような、不思議な喜びに包まれました。自分の眼に映った景観が、また父の臉にも浮かんでいるはずだ、皮膚にそよぐ微風や、降り注ぐ暖かい日差しは、また父も今感じ取っているに違いない、という無根拠な直観がありました。信じられないような快晴は、翌朝もなお続きました。世界最大の木造千手観音を本尊とする普佑寺、ラマのポタラ宮殿を模したといわれる普陀宗乘之廟、どちらも観光地として近年修復の手が加えられたものですが、その規模は圧倒的なものでした。山裾を這い上る伽藍に誘われるようにして奥に進むにつけ、門をひとつまたひとつと越える度に、つぎつぎと思わぬ眺望が開けてきます。経筒を回す参詣者の姿が、濛々たる線香のむこうに霞みます。祈りを捧げる機会の得られたことに、すなおな気持ちで感謝の念が沸きました。強烈なまでの香気を発する線香を、

記念に買いました。

北京への帰途、夕刻間際に、ほんの僅かな時間ですが、金山嶺長城に立ち寄ることもできました。北京郊外の八達嶺にもまして、万里の長城が、もつとも雄大な姿で迫る名所です。そこに立つて、人生というものを思いました。全長五千キロの長城を独力で踏破することは、常人にできることではありません。それでも急な階段を上り詰めると、不意にあらたな視野が開け、さらにそのさきには、さらなる広大な旅程が姿を現します。眼下に眼を移すと、うねるような山並みには、一面に杏の木が点在していて、ちょうど可憐な白い花をいっぱいにつけていました。さらに前方の行く手を見上げると、ひとときわ高い櫓のうえには、青空のなか、白雲がぼつかりと浮かび、ゆつくりと流れて行きました。ひとは峠から峠へと至る旅路を辿り、あるとき、その地上の有限な旅程を離れて、永遠の空に浮かぶ一片の雲へと、その姿を変じてゆくものなのかも知れません。自分の傍らにいま父が居て、ともにこの光景に接している。そして自分の今見ている広大な丘陵を、父の霊もまたゆつくりと空に漂いながら、悠々と見下ろして旅をしているに違いない、と感じました。

つい二日前にはまだ蕾みだった連翹が、帰路ではいたるところで黄色い花を開いていました。土地の言葉では、連翹のことを迎春花と申します。春を迎えるなかで、新たな旅路へと着いた父の幸せを思いました。「願わくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」。そんな西行の句を引いて冗談を言ったこともありました。「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし」、が口をついて出てきました。そして夕闇迫るころには、広大な内モンゴル間際の山間で、これまた広大なせき止め湖の彼方に、大陸の太陽が黄色くなって、その光りを水面いっぱいにきらめかせながら、ゆつくりと沈んで行きました。父がこの世を後にして初めての夕日です。思えば父は、旅順に生まれ、その幼少時代を満州に過ごしました。父の父もこの大陸、朝鮮の白頭山にほど近い間島郡で最期を迎え、内地で高校生だった父は、その死に目に会うことも適いませんでした。その父の親しんでいたであろう、大陸の原風景が、今こうして、夕照のなかに目の前いっぱい広がり、私の身をも黄金の色彩に染めていました。父の言葉に従い、敢えて中国まで旅に出て、それゆえに父の死に目には見えなかった。でも、そのことに、もはや後悔はありませんでした。いまや、この二日間の経験のすべてが、父からの最後の、そして最大の贈り物だったのだ、との確信を得ていたからです。

息子がこのように勝手ばかりをして、母には大変な心労をかけました。その母を助けてくださった玉野正代様、ご相談に乗っていただき、最期までお世話戴いた石橋信三医師をはじめとする何人ものお医者様、看護婦の皆様、また本日の式を準備万端整えて滞りなく進行してくださった、広島大学の位藤邦生先生、安田女子大学の齋木泰孝先生、また広島大学の妹尾好信先生には、この場を借りてふかく感謝申し上げます。また順序は逆になりますが、お心の籠もった弔辞を戴いた、安田女子大学学長、河野真先生、広島大学大学院文学研究科長、頼祺一先生、そして大阪大学大学院文学研究科の伊井春樹先生にも、最後に改めて深く御礼申し上げます。故人の学者、そして教育者としての人となりにつき、親族から改めて、さらに付け加えるべきことは何もないかと存じます。

病状が発覚した昨年十一月ごろに、父はなにか冗談めかしてこう言った、と聞いております。来年三月末までは残務処理に専心し、四月になったら、ゆつくり休む、と。当時検査結果を告げたお医者様は、三月まではちよつと無理でしょう、せいぜい一月ぐらいいまでかな、とお答えだった由です。ところが結局父は、お医者様たちの予想を裏切って、生き延びました。一時は、いつまでたっても余命一カ月だ、などと冗談も言い合いました。あくまで自分に忠実に、雄々しく、前向きに、そして周囲への配慮を常に忘れぬまま、何時もと変わらぬ平常心をもって、泣き言や弱音ひとつ吐かず、自分の身体を冷徹に見極めつつ、最善を尽くして、一日、一日を大切に、最期まで生き抜きました。すでに今年の年賀状の発送を自分で処理しただけでも奇跡でしたが、三月十五日の確定申告も、結局自分で心配を振るい、杜撰な頭脳しかない息子は、整然と分類された書類の山に呆れるとともに、間違いをあちこちで指摘されて、参りました。四月三日、息子との別れの当日も、話題はといえば、さる写本の来歴に関する最新情報でした。自分の頭のなかで、あらたな文献学的ジクソーパズルが自在に組み上がってゆくのを、心から楽しんでる様子が、門外漢の俄弟子にも、はっきりと分かりました。

そして三月の残務整理期間も終わり、四月の新たな春を迎えると、父は、自分で立てた予定どおりの時期に、自分の願っていた姿とはやや異なった最期ではあったかもしれないませんが、永久の休息を得ることとなりました。その様子を近くから見ていた者のひとりとして、改めて見事な人生の幕切れであった、と感嘆しています。「名残惜しいか」と問われて「惜しくない」と答える者はおりません。しかし切れることで生まれる縁というもの、死に別れることで、かえって強くなる絆というものを、父は我々残された者に示してくれたように思います。本日ご参集戴いた皆様が、その何よりの証しです。ご会葬の皆様とともに、父の旅立ちを言祝ぎたく存じます。本日はまことにありがとうございます。

西暦二千一年四月十四日

稲賀 繁美

II 五十日祭に際して―御挨拶

肅啓

皆様には愈々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、先般、稲賀敬二、永眠に際しましては、御懇篤なる御弔慰、並びに御鄭重なる御香志を賜り、御芳情誠に有難く、厚くお礼申し上げます。

本日、五十日の祭礼を、内輪にて、滞りなく相営みました。ここに、御報告を兼ねて、故人が遺しました講演の録音からその内容を活字に起こした一片^{（原）}を選び、謹んでお贈り申し上げます。

これが、皆様へ語りかけた、生前最後の機会となりました。故人の学風や人柄を偲んでいただくよすがとして、お届けすることに致しました。お納め頂けましたら幸いです。

満開の桜が萎れることなく散るように、半年の凜凜しい闘病の末、明晰なまま、平安に包まれて、永遠の安らぎを得ることとなりました。別れの直前まで、「中世王朝物語」論をテープに吹き込み、最期は、若い頃に好んだ、アルゼンチン・タンゴを聴きながら、光明の世界に向かつて、自ら進んでゆく言葉を口にして、息を引き取りました。

お届けした冊子には、紫式部の歌が引用されております。あたかも、供養の時を予感していたかのような、この歌を添えて、御挨拶に代えさせていただきます。

我が宿の藤の色濃き黄昏に

尋ねやは来ぬ春の名残りを

敬具

平成十三年五月二十八日

稲賀 久美子
稲賀 繁美

(注) 『源氏大学 講義録』(講談社 オン・デマンド出版)

平成十二年六月二十七日 源氏大学二〇〇〇広島校講義

「源氏物語・散逸した巻々と現存の物語」

URL <http://www.genji-daigaku.com> 参照

『平安文学資料稿』(第三期)の二案内

- ◇巻数を囲んだものが既刊です。
- ◇原則として購読会員にのみ頒布いたします。
- ◇購読会員には、本誌『古代中世国文学』を差し上げます。
- ◇詳しくは本会事務局までお問い合わせ下さい。

○第六巻 伊勢物語古註 室町鈔(広島大学蔵)上

具 惠卿 校

〔第五回配本 平成十年四月刊〕

頒価一四〇〇円

○第七巻 伊勢物語古註 室町鈔(広島大学蔵)下

具 惠卿・藤川功和 校

〔第六回配本 平成十一年三月刊〕

頒価一四〇〇円

○第八巻 歌道秘伝書(広島大学蔵)

山崎 真克 校

〔第七回配本 平成十一年七月刊〕

頒価一五〇〇円

○第九巻 源語類聚抄(広島大学蔵)上

井上新子・赤照子 校 《次回配本》

○第十巻 源語類聚抄(広島大学蔵)下

校訂者未定

○別巻一 佚名 源氏物語梗概書(広島大学蔵)上

稲賀 敬二・妹尾 好信 校

〔第八回配本 平成十一年十二月刊〕

頒価一四〇〇円

○別巻二 佚名 源氏物語梗概書(広島大学蔵)中

稲賀 敬二・妹尾 好信 校

〔第九回配本 平成十二年七月刊〕

頒価一四〇〇円

○別巻三 佚名 源氏物語梗概書(広島大学蔵)下

稲賀 敬二・妹尾 好信 校

〔第十回配本 平成十二年十二月刊〕

頒価一五〇〇円

○第一巻 定家流 伊勢物語 千金莫伝(広島大学蔵)

妹尾 好信・辻野 正人・森下 要治 校

〔第一回配本 平成七年七月刊〕

頒価一四〇〇円

○第二巻 冷泉持為注 古今抄(広島大学蔵)上

田野 慎二・山崎 真克 校

〔第二回配本 平成八年五月刊〕

頒価一五〇〇円

○第三巻 冷泉持為注 古今抄(広島大学蔵)下

田野 慎二・山崎 真克 校

〔第三回配本 平成九年五月刊〕

頒価一五〇〇円

○第四巻 伊勢物語 遣遙院御抄(阿波国文庫旧蔵・広島大学蔵)上

妹尾 好信・安道 百合子 校

〔第四回配本 平成九年九月刊〕

頒価一四〇〇円

○第五巻 伊勢物語 遣遙院御抄(阿波国文庫旧蔵・広島大学蔵)下

朝倉 和・猪川 優子 校

〔第十一回配本 平成十三年九月刊〕

頒価一五〇〇円

編集後記

二十一世紀最初の号を稲賀敬二先生の追悼号として編むことになるとは、まことに残念である。毎回「編集後記」の内容が暗いというご意見をよくいただき、現今の大学、とりわけ文学部、中でも国文科のおかれている状況を思うとついつい暗くなってしまっているのだ。が、せめて新世紀の第一号は明るい内容にしようと思っていたのだが、そうはいかなくなってしまう。

稲賀先生は、本研究会ならびに本誌の生みの親である。伊井春樹氏によれば、広島平安文学研究会が発足したのは昭和四十一年の春のことらしい。稲賀先生三十八歳の時である。平成九年八月に発足三十周年を記念し、併せて先生の古稀をお祝いする意味もこめて「稲賀先生を囲む会」を催した。その席で、私は、二十年後に五十周年記念と卒寿のお祝いの会を開くまでお元気でいていただきたいと申し上げた。先生は、と

てもそんなにはもたないよと笑い飛ばされたが、決して夢物語だとは思わなかった。実現できることだと思っていた。それなのに、卒寿どころか喜寿さえ待たずに逝ってしまったとなると、全く断腸の思いである。先生は、私たち門下生にとつてつねに精神的な支えであっただけでなく、そのお仕事を通じて学問に対する情熱と愛情を身を持って示し続けて下さった。支えを失った空虚感の中、先生がこれからなされるはずだったお仕事を思うと、無念至極である。先生のお人柄からして、大げさな追悼企画は好まれないだろう。しかし、先生の創刊された本誌でささやかな追悼記念号を作ることはお許し下さるごと思つた。本号を謹んで先生のご霊前に捧げ、ご冥福をお祈りするとともに、我々門下生の今後を見守って下さるようお願いするばかりである。最後に、今回の追悼企画にご賛同いただき、ご多忙の中追悼文をご寄稿下さった諸先生方や門下生の方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。(妹尾記)

古代中世国文学 第十七号

平成十三年九月三十日 印刷

平成十三年九月三十日 発行

(非売品)

発行者 広島平安文学研究会

(代表 妹尾 好信)

発行所 (〒七三九一八五二二)

広島県東広島市鏡山一―二―三

広島大学大学院文学研究科内

広島平安文学研究会

電話 (八二四二四一六六九)

振替 〇三三〇一〇七六三

印刷所 株式会社タカトプリントメディア

印刷所 株式会社タカトプリントメディア